ROSEリポジトリいばらき　（茨城大学学術情報リポジトリ）

Title	教育学部大学生の性に関する知識と指導に対する考えについて
Author(s)	粟野, 智美; 廣原, 紀恵
Citation	茨城大学教育学部紀要. 教育科学, 68: 285-296
Issue Date	2019-01-29
URL	http://hdl.handle.net/10109/13754
Rights	

このリポジトリに収録されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作権者に帰属します。引用、転載、複製等される場合は、著作権法を遵守してください。

お問合せ先

茨城大学学術企画部学術情報課（図書館）　情報支援係
http://www.lib.ibaraki.ac.jp/toiawase/toiawase.html

茨城大学教育学部紀要（教育科学）68 号（2019）285 － 296

教育学部大学生の性に関する知識と指導に対する考えについて

粟野智美*・廣原紀恵**

（2018 年 8 月 31 日受理）

A Survey Among University Student's Regarding Their Knowledge about Sex and Ideas About Sex Education: Focusing on Students Who Belong to the Department of Education

Satomi Awano* and Toshie Hirohara**

(Accepted August 31, 2018)

はじめに

近年，性に関する様々な課題が大きな社会問題となっている。片瀬[1]によると，未成年者の初めての性交年齢は男子女子ともに 15 歳以下という者が増加しており，性交開始年齢は年々低年齢化している。また，性感染症の流行も危惧されており，特にその一つである梅毒は，この数年間に急激にその罹患者数を増加させ，平成 25 年度には 1228 件だった報告数が，平成 28 年度には 4559 件となり，4 年間で約 4 倍に急増している[2]。そして日本は，アメリカやイギリスなども含めた主要先進国 7 か国の中で，唯一新規HIV/エイズ感染者数が増加している国でもある[3]。また，文部科学省は平成 28 年に，「性同一性障害や性的指向・性自認に係る，児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について」という教職員向けの周知資料を作成している。この資料は主にLesbian（レズビアン）・Gay（ゲイ）・Bisexual（バイセクシャル）・Transgender（トランスジェンダー）（以下LGBT）の児童生徒に向けて教職員へ配慮を求める内容となっており，性自認と性的嗜好の違いや，同性愛や両性愛についての記述も見られる[4]。これは，学校現場でも，こうした悩みや不安を抱える性的マイノリティの児童生徒に対し，きめ細かい支援をしていくことへの需要が高まっていることを意味している。このような性に関する様々な課題は，現代を生きる全ての人々にとって，身近なものとなりつつあると言っても過言ではないだろう。それに伴い，学校現場で行われる性に関する教育が一層重要視されると思われる。

その一方で，日本では，性に関する指導について「寝た子を起こすな」という風潮がある。性に関する指導を行うことにより，児童生徒の性に関する問題行動が誘発されるという考え方である。

*茨城大学大学院教育学研究科（〒 310-8512　水戸市文京 2-1-1；Graduate School of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）.
**茨城大学教育学部教育保健教室（〒 310-8512　水戸市文京 2-1-1；Laboratory of Health Education, College of Education, Ibaraki University, Mito 310-8512 Japan）.

しかし，坂口ら[5]により，適切な時期に適切な方法による正確な性の情報提供は，責任ある行動を促し，性行動の開始を遅らせると報告されている。性に関する興味関心を持つ以前の段階から，正しい知識の提供をすることで，児童生徒が発達段階に応じた性に関する適切な態度や行動の選択ができるようになると考えられる。また，平成 17 年 7 月 27 日に行われた「健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会」[6]では，性に関しては様々な価値観の相違があり，性に関する指導についても様々な考え方があるが，学校における性に関する指導として求められる内容は何かということについては共通理解を図って議論すべきであるという意見が出されている。このように，学校における性に関する教育は，全職員の共通理解の下に，学校教育全体を通して行われるべきものである。

そこで本研究は，将来教員となり性に関する指導を行う可能性がある教育学部大学生を対象にし，性に関する知識と指導に対する考えについて質問紙調査を行い，実態を明らかにし，性に関する指導のための基礎的な資料を得ることを目的とする。

研究方法

平成 29 年 9 月 28 日から平成 29 年 11 月 21 日の期間に，Ａ県内のＢ大学で教育学部に所属する大学生男女を対象として，無記名・自己記入式の質問紙調査を行った。540 人から回収され，そのうち回答に不備のない 528 人を分析の対象とした。有効回答率は 97.8％であった。分析対象者の属性は以下の表 1 ～表 3 の通りである。

質問紙調査はすべて個人が特定されることのないよう無記名で実施した。得られた個人情報や調査結果は本研究のみに使用し，調査目的以外では使用しないことを質問紙上に記載し，質問紙配布時にも口頭で説明した。また，調査は回答の提出をもって同意を得られたものとした。回収した質

表 1　性別（N=528）

	n	%
男性	231	43.8
女性	292	55.3
どちらでもない	5	0.9

表 2　所属（選修･課程）(N=528)

	n	%
英語	10	1.9
音楽	28	5.3
家庭	10	1.9
技術	36	6.8
国語	45	8.5
社会	17	3.2
理科	61	11.6
数学	87	16.5
美術	17	3.2
保健体育	41	7.8
教育実践科学	42	8.0
特別支援教育	25	4.7
養護教諭養成	53	10.0
情報文化	7	1.3
人間環境教育	11	2.1
無回答	38	7.2

表 3　学年（N=528）

	男性 (n=231)		女性 (n=292)		どちらでもない (n=5)		全体 (n=528)	
	n	%	n	%	n	%	n	%
大学 1 年生	59	25.5	117	40.1	1	20.0	177	33.5
大学 2 年生	60	30.0	101	34.6	1	20.0	162	30.7
大学 3 年生	56	24.2	57	19.5	2	40.0	115	21.8
大学 4 年生	52	22.5	14	4.8	0	0.0	66	12.5
大学院 1 年生	4	1.7	2	0.7	0	0.0	6	1.1
大学院 2 年生	0	0.0	1	0.3	0	0.0	1	0.2
その他	0	0.0	0	0.0	1	20.0	1	0.2

問紙はMicrosoft Excel2010，IBM SPSS Statistics20.0（for Windows）を用いて統計処理を行った。また，自由記述については，内容分析により類似性に沿ってサブカテゴリーを生成し，さらにサブカテゴリーからカテゴリーを生成した。カテゴリー生成の過程においては，研究者間で検討を行い，カテゴリー化の妥当性の確保に努めた。

結　果

1．性に関する指導に対する考えについて

「児童生徒に性に関する指導を行うことは必要であると考えていますか」という問いに対して，「必要である」と答えたのは91.3％（482人）と最も多く，「必要ではない」1.7％（9人），「わからない」7.0％（37人）であった。（図1）

「児童生徒に性に関する指導を行うことは必要である」と答えた482人に，「性に関する指導は誰が行った方がよいと考えていますか」と尋ね，「保健・体育の教科担任」「養護教諭」等「その他」を含む9項目から複数回答を可として選択させた。「保健・体育の教科担任」75.9％（366人）が最も多く，「養護教諭」72.4％（349人），「産婦人科医・助産師」34.9％（168人），「学級担任」28.0％（135人），「その他」（6人）であった。「その他」は「性に関するプロフェッショナル」「外部講師」などであった。（図2）

「児童生徒に性に関する指導を行うことは必要である」と答えた482人に，「児童生徒に性に関する指導が必要だと考えるのは，なぜですか」と尋ね，複数回答を可として「その他」を含む6項目から選択させた。「望まない妊娠などの性の問題行動を防ぐために必要だから」82.6％（398人）が最も多く，「性に関する間違った情報が氾濫しているから」51.0％（246人），「その他」2.3％（11人）であった。「その他」は「性に関する知識を持たない人が大学生にもいて危機感を持ったから」「命の大切さを知るいい機会になるから」などであった。（図3）

「児童生徒に性に関する指導を行うことは必要ではない」と答えた9人に，「児童生徒に性

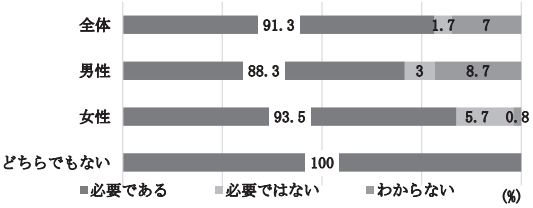

図1　性に関する指導の必要性について（N=528）

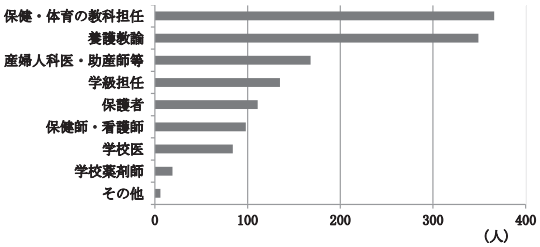

図2　指導は誰が行った方がよいか（n=482）

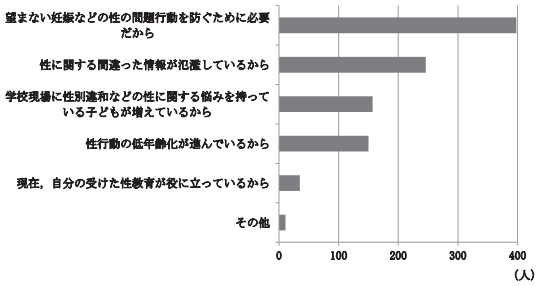

図3　性に関する指導は必要であると考える理由（n=482）

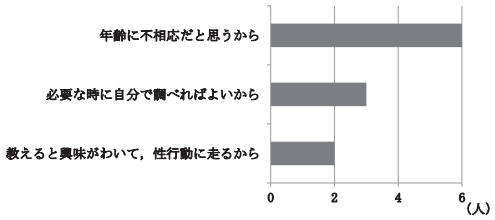

図4　性に関する指導は必要ではないと考える理由（n=9）

に関する指導を行うことは必要ではないと考えるのは，なぜですか」と尋ね，複数回答を可として「その他」を含む 6 項目から選択させた。「年齢に不相応だと思うから」66.7%（6 人），「必要な時に自分で調べればよいから」33.3%（3 人）であった。（図 4）

「児童生徒に性に関する指導を行うことが必要かわからない」と答えた 37 名に，その理由を自由記述で回答させた。その内容は「この問題については賛否両論あり，難しいから」「必要とも必要でないとも判断できないから」「性教育の適切な指導時期や発達段階がよく分からないから」「知識を得ることによって起こりうる問題もあると思うから」「性教育のメリット・デメリットが分からないから」などであった。

対象者が将来教員になると仮定し，「児童生徒に自身で性に関する指導を行いたいと思いますか」という問いに対して，「行いたい」22.2%（117 人），「行いたくない」40.5%（214 人），「わからない」37.3%（197 人）であり，「行いたくない」が最も多かった。（図 5）

「児童生徒に自身で性に関する指導を行いたい」と答えた 117 人に，「性に関する指導を自身で行うにあたって，不安に思うことはありますか」と尋ね，複数回答を可として「その他」を含む 6 項目から選択させた。「性教育をうまく行える自信がない」と答えたのは 57.3%（67 人），「性に関する知識が自分に不足している」56.4%（66 人），「その他」2.6%（3 人）であった。「その他」は「自分は女なので，月経や妊娠のことはある程度教えられるが，男性のことはよく分からない」「男女平等に教えられるか不安」「保健の先生や養護教諭等より専門的に学んだ人が教えた方が良い」であった。（図 6）

「児童生徒に自身で性に関する指導を行いたくない」と答えた 214 人に，「自身で性に関する指導を行いたくないと考えるのはなぜですか」と尋ね，複数回答を可として「その他」を含む 5 項目から選択させた。「性教育を行うことに自信がないから」と答えたのは 73.8%（158 人），「性についてあまり知識がないから」31.3%（67 人），「その他」8.9%（19 人）であった。「その他」は「面倒だから」「性についての専門知識を持つ人が行うべき」「自分が説得力のある性に関する説明ができるかが分からない」「自分である必要がない」「性教育を行うと逆効果だと思う」「性教育をする時間があまりないと思う」「からかわれるかもしれない」「難しい」などであった。（図 7）

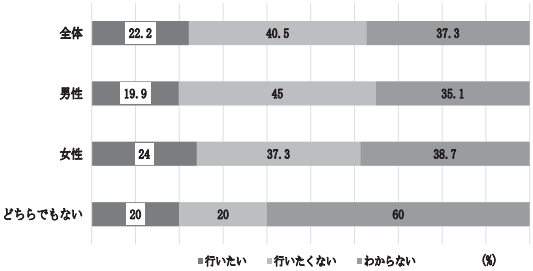

図 5　児童生徒に自身で性に関する指導を行いたいか（N=528）

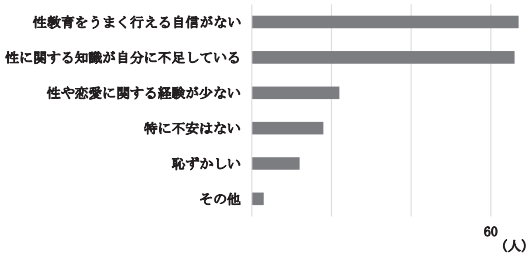

図 6　指導を行う上で不安に思うこと（複数回答可・n=117）

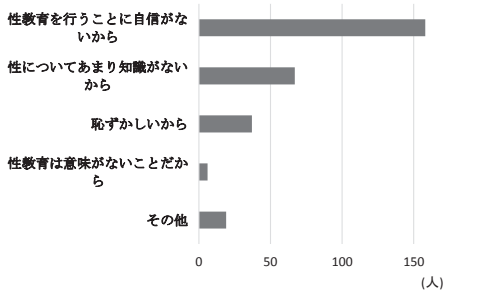

図 7　自身で指導を行いたくない理由（n =214）

「児童生徒に自身で性に関する指導を行いたいかがわからない」と答えた 197 人に，その理由を自由記述で回答させた。160 人から回答が得られ，その内容を言葉からコードを抽出し，類似するものをサブカテゴリー化し，さらにカテゴリー化した結果，『不安』『他者への期待』『意欲』『興味・関心のなさ』『児童生徒への影響』『その他』の 6 つに集約できた。占めるコード数が最も多いのは，『不安』だった。（表 4）

表 4　児童生徒に自身で性に関する指導を行いたいかがわからない理由（n＝ 160）

カテゴリー	サブカテゴリー	代表的なコード
不安	自信のなさ	「上手くできる自信がない」「できる自信はないが，必要」「自分で行う自信はない」「自信はないが，学校の方針に従う」(47)
	知識のなさ	「正確な知識がない」「現在の知識では教えることは不可能」(19)
	指導内容への不安	「教え方や内容に不安がある」「授業内容を想定できない」「どのような言葉を使えばいいのかわからない」(15)
他者への期待	養護教諭	「養護教諭がやった方がよい内容が多い」「養護教諭に教わった記憶がある」(18)
	専門家	「専門家が行うべき」「専門家の正しい知識を教授した方がよい」(2)
	保護者	「教員がやる仕事ではなく，保護者が行うべき」(1)
意欲	意欲	「必要であれば行う」「自ら進んでは行わない」(12)
	指示を待つ	「管理職からの指示があれば行う」(5)
	面倒	「面倒くさい」(1)
興味・関心のなさ	興味・関心がない	「行いたいとも行いたくないとも思わない」(6)「性に関することに興味がない」(1)
児童生徒への影響	適切性	「性に関する指導を行うことが適切かどうかわからない」(6)
	影響	「児童生徒の心身への影響がわからない」(1)
その他		「指導する時間がないと思う」(1)「恥ずかしい」(1)「自分が教員となる姿が想像できない」(1)

2．性教育の内容について

学校で今までに教わったことのある性に関する指導について,「その他」を含む 18 の項目を設け，複数回答を可として選択させた。「HIV/エイズ」と答えたのは 95.3％（503 人），「性感染症」90.7％（479 人），「妊娠の仕組み」90.0％（475 人），「月経について」87.5％（462 人）で多かった。（図 8）

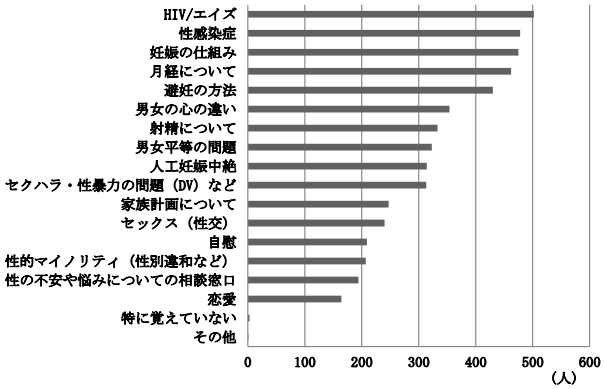

図 8　学校で今までに受けたことのある性に関する指導（N=528）

対象者が教員になると仮定し，「管理職に依頼され，子どもたちに性についての指導を行うことになりました。あなたが現在の自分の知識で，指導を行うことができると考えるものを答えて下さい」という問いを行い，「その他」を含む 18 の項目を設け，複数回答を可として選択させた。「妊娠の仕組み」と答えたのは 45.5％（240 人），「避妊の方法」44.9％（237 人），「月経について」36.9％（195 人），「HIV/エイズ」29.0％（153 人）であった。また，「特になし」という回答は 129 人（24.4％）みられた。（図 9）

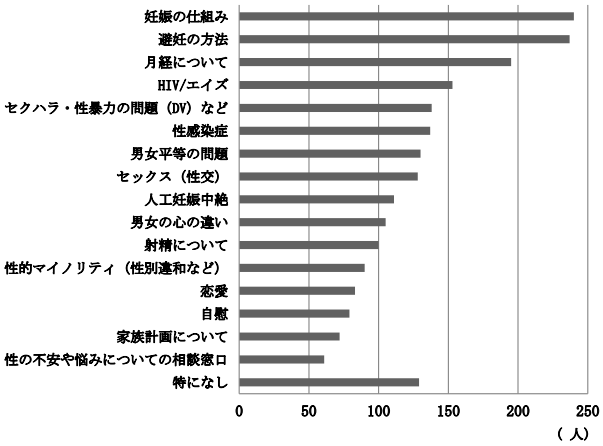

図 9　性について自分が指導できると思うこと（N=528）

3．性に関する知識について

性に関する知識について，「膣外射精をすれば，確実に避妊をすることができる」「日本で 1 番罹患者数の多い性感染症は，梅毒である」などの 8 つの質問項目を設けた。「正しい」「間違っている」「わからない」の 3 つから選択させ，その出現率を図 10 に示した。正解が多かった項目は，「人工妊娠中絶は，妊娠期間中であればいつでもできる」（84.1％），「膣外射精をすれば，確実に避妊することができる」（83.1％），「HIV/エイズは咳やくしゃみからうつることもある」（73.9％）であった。不正解が多かった項目は，「子宮頸がんは，ウイルス性のがんである」（33.7％）であった。「わからない」と答える者が多かった項目は，「日本で 1 番罹患者数の多い性感染症は，梅毒である」（62.1％），「子宮頸がんは，ウイルス性のがんである」（52.7％）であった。さらに，「デートDV」「家族計画」「LGBT」の 3 つの言葉について言葉の意味を記述させ，その記述内容から「正解」「不正解」と判断した。（図 11）「デートDV」の正解例は「交際している相手に対して暴力的な言動をすること」「交際関係にある人物に対し，精神的，物理的な暴力を振るうこと」などであり，「デート中に暴言や暴力を相手に振るうこと」「デートを強要されたりすること」などは不正解とした。「家族計画」の正解例は「子どもを何人作るか，いつ作るかなどといった計画」「何人子どもを作るか，どの時期，年齢で作るかの将来を計画すること」などであり，「自分の理想の家族を計画すること」「人生のうち，何歳で何をするかを計画すること」などは不正解とした。「LGBT」の正解例は「レズビアン，ゲイ，バイセクシャル，トランスジェンダー」「同性愛者，両性愛者，性別違和」などであり，「発達障害」「心と身体の性が異なること」などは不正解とした。その結果，1 番正解の多かった質問項目は，「家族計画」（39.6％）であった。また，無回答は「デートDV」（61.7％），「家族計画」（48.7％），「LGBT」（48.5％）すべての項目で約半数みられた。

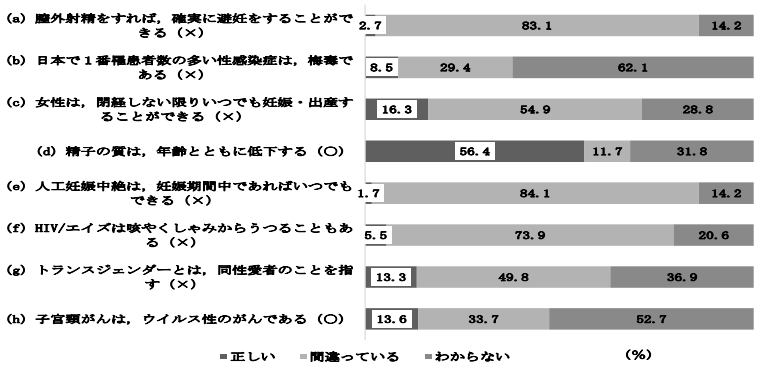

図 10　性に関する知識の正解・不正解①（N=528）

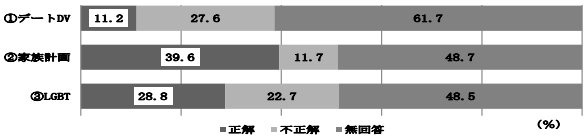

図 11　性に関する知識の正解・不正解率②（N=528）

性に関する知識を問う設問で，選択式の 8 つの質問項目に正解した場合は各 1 点，記述式の 3 項目に正解した場合は各 2 点を与え，誤答及びわからないまたは無回答だった場合は 0 点とした。全て正解ならば 14 点となる。その結果，全体の平均点は 6.0 点，標準偏差は 2.53 であった。

「児童生徒に自身で性教育を行いたいと考えるか」と性に関する点数との関連の有無を検討した。「児童生徒に性教育を自身で行いたい」と答えた学生と，「行いたくない」と答えた学生との間で，性に関する知識の理解の高低との関連の有無を検討した。（表 5）また，「行いたい」と答えた学生と，「わからない」と答えた学生との間で，性に関する知識の理解の高低との関連の有無を検討した。（表 6）「行いたくない」と答えた学生と「わからない」と答えた学生との間で，性に関する知識の理解の高低との関連の有無を検討した。（表 7）その結果，「児童生徒に性教育を自身で行いたい」と答えた学生は「行いたくない」「わからない」と答えた学生と比較し，性に関する知識の理解の点数が有意に高かった。

表5　性に関する知識について（性教育を「行いたい」という意思の有無との検討）①

行いたい (n=117)		行いたくない (n=214)		t検定 p値
平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	
7.6	2.84	6.6	3.10	0.003**

表6　性に関する知識について（性教育を「行いたい」という意思の有無との検討）②

行いたい (n=117)		わからない (n=197)		t検定 p値
平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	
7.6	2.84	6.8	3.20	0.028*

表7　性に関する知識について（性教育を「行いたい」「わからない」という意思との検討）

行いたくない (n=214)		わからない (n=197)		t検定 p値
平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	
6.8	3.10	6.6	3.10	0.632

「性教育は誰が行った方がよいと考えるか」という項目で，1 番回答の多かったのは「保健・体育の教科担任」であり，2 番目は「養護教諭」であった。その結果に着目し，「保健体育選修」所属の学生と「養護教諭養成課程」所属の学生が，所属する選修・課程が不明な 38 人を除く他選修・課程の学生よりも性に関する知識の理解が高いかどうか，学生の平均点数を比較した。（表 8）（表 9）また，「保健体育選修」所属の学生と「養護教諭養成課程」所属の学生の平均点数を比較した。（表 10）その結果，「保健体育選修」所属の学生と他選修・課程の学生では知識の高低に差はなかった。また，「養護教諭養成課程」所属の学生は，「保健体育選修」所属の学生や他選修・課程の学生よりも，性に関する知識の理解が有意に高かった。

表 8　性に関する知識について（所属学科との検討）①

保健体育選修 (n=41)		他選修・課程 (n=396)		t検定 p値
平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	
5.9	1.64	5.9	2.55	0.908

表 9　性に関する知識について（所属学科との検討）②

養護教諭養成課程 (n=53)		他選修・課程 (n=396)		t検定 p値
平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	
7.4	2.19	5.9	2.55	0.000***

表 10　性に関する知識について（所属学科との検討）③

養護教諭養成課程 (n=53)		保健体育選修 (n=41)		t検定 p値
平均点	標準偏差	平均点	標準偏差	
7.4	2.19	5.9	1.64	0.000***

考　察

現在，学校における性に関する指導は各学校の全教育活動を通じて実施されること[7]になっている。広瀬[8]は，「小学校体育科保健領域では思春期の身体の変化，異性への関心の芽生え，年齢とともに発達する心，不安や悩みへの対処などが扱われる。中学校保健分野では身体機能の年齢による発達，思春期の生殖にかかわる機能の成熟，思春期の変化に対応した適切な行動が扱われる。高等学校保健体育科科目保健では生涯の各段階の健康課題に応じた自己の健康管理，異性を尊重する態度や性に関する情報等への対処，適切な意志決定や行動選択などが扱われる。高等学校家庭科では男女が協力して家庭を築くことの重要性，家族や家庭生活の在り方など扱われる。特別活動では望ましい人間関係の育成，心身ともに健康で安全な生活態度の育成，健全な生活態度や習慣の確立，生命の尊重，男女相互の理解と協力，性的な発達への適応，コミュニケーション能力の育成と人間関係の確立などが扱われる。道徳では友だち（男女）仲よく助け合う，生命を大切にすることなどが扱われる」としている。すなわち，小・中・高等学校と連続して取り組み，また特定の教科に限るのではなく，その教科の特質に合わせた指導を行うことで，子どもたちにより効果的に指導を行うことができると考えられる。

本研究では，調査対象とした大学生 528 人のうち，91.3%（482 人）が児童生徒に性に関する指導を行うことは「必要である」と答えている。必要であるという理由は，「望まない妊娠などの性の問題行動を防ぐために必要だから」「性に関する間違った情報が氾濫しているから」などが多く

挙げられていた。これは児童生徒を取り巻く社会環境が変容していく中で，高校生の性器クラミジアなどの性感染症の流行[9]が問題になっていることや，性的マイノリティ当事者の多くは学齢期にいじめなどの困難に直面していること[10]など，学校現場で行われる性に関する指導の重要性がますます高まってきていることが背景と考えられる。一方で，児童生徒に性に関する指導を行うことは「必要ではない」という答えもわずかではあるが 1.7%（9 人）みられた。その理由は，「年齢に不相応だと思う」「必要な時に自分で調べればよい」などがあげられていた。しかし，性に関する指導を行う上で重要なことの 1 つとして,「児童生徒の発達段階（受容能力）を十分考慮すること」[6]が挙げられている。指導内容や指導方法を児童生徒の実態や発達段階に合わせて各学校が考慮しながら指導を行うことで, より児童生徒に正しい知識の定着を促すことができると考えられる。また，必要時に自ら性について調べ，学習することは重要なことであるが，個人での学習は習得内容の精度に差があり，また現代はテレビや雑誌，インターネット等メディアの発達により性情報が氾濫し，その中には間違った情報も含まれるため，やはり学校現場で基礎的な性に関する知識を伝達することは必要であると考えられる。また，児童生徒に性に関する指導を行うことが必要かどうか「わからない」という答えも 7.0%（37 人）あった。これは，学校現場での性に関する指導が重要視される反面，未だ性に関する指導に対して「寝た子を起こすな」という風潮も残っており，この 2 つが混在しているため，性に関する教育が必要かどうか判断に迷い，「わからない」としているとも考えられる。「知識を得ることにより問題が起こる」ことについても危惧しており，学生自身が「寝た子を起こすな」という思いを持っていることが窺えた。しかし，渡辺の大学生対象の調査報告[11]によると，「大学生が初めて性的メディアに接した時期は，男子は小学 5 年生未満が 54%，女子は小学 5 年生未満が 30%」であり，子どもたちは学校が性に関する指導を開始する以前に，性に対し興味関心を持ち始めていると推測できる。そのため，性に対して興味を持ち始める前の段階から，発達段階に合わせた指導を行うことが求められると考えられる。

児童生徒に性に関する指導を行うことは「必要である」という答えは非常に多かったが，その反面, 児童生徒に自身で性に関する指導を「行いたい」と答えた者は 22.2%（117 人）と少なかった。「行いたい」と考える理由の中で 1 番多かったものは，「児童生徒に性に関する正しい知識を教えたいから」というものであった。これは前述の通り，間違った性情報の氾濫する現代社会で，児童生徒に正しい知識を伝えなければならないという思いが背景にあると考えられる。しかし，性に関する教育は必要ではあるが自分では行わず，多くの調査対象者は，性に関する指導は「保健・体育の教科担任」「養護教諭」が行った方がよいと考えている。学校における性に関する指導は学校全体で共通理解を図って行われるものであり，「保健・体育の教科担任」や「養護教諭」などの特定の教員だけでなく，すべての教員が児童生徒の実態などの情報を共有し，一丸となって行うことが望ましいと思われる。また，児童生徒に自身で性に関する指導を行う上で不安に思うこと，性に関する指導を行いたくない理由，性に関する指導を行いたいかどうかがわからない理由の上位 2 つはすべて共通して「性に関する指導をうまく行える自信がない」「性に関する知識が自分に不足している」であった。性に関する指導については学習指導要領に明記されてはいるものの，「保健体育」以外については非常にその記述が少なく，性に関する指導については指導内容や指導方法に不安を持っている大学生が多いことが明らかとなった。そのため，大学では，大学生の教職科目の中で性を扱う内容を取り入れたり，リプロプロダクトのような生き方を含めた性に関する教育の科目を立て，

学生時代に学ぶ機会を提供することも必要かと思われる。さらに，学校現場で性に関する指導を行う際には，教職員同士が相談・情報交換をしやすい体制づくりや，保健・体育科教員や養護教諭，外部講師による教職員向けの勉強会や研修会を行うことが望ましいと考えられる。教職員が研修を受けることで，指導方法や知識を得ることができ，性に関する指導を実施することの不安感が解消されるかと思われる。

学校で今までに受けたことのある性に関する指導については，全対象者 528 名のうち，約 80％の学生が「HIV/エイズ」「性感染症」「妊娠の仕組み」「月経について」「避妊の方法」を「受けたことがある」と答えていた。この 5 つの内容は体育・保健体育の学習指導要領に指導について明記されており，教育課程上で重要視されている項目であり，学習指導要領に則して指導がなされたと考えられる。反対に，回答が少なかったのは「恋愛」「性の不安や悩みについての相談窓口」であった。この 2 つの項目は，学習指導要領上で指導について明記はされていないため，教育課程上には位置しておらず，学校によっては指導が実施されていないのではないかと思われる。児童生徒の実態に合わせ，体育・保健体育の授業以外でも家庭科や倫理，現代社会などの教科や特別活動などで，指導内容を検討しながら，性に関する指導を行っていくことが望ましいと考えられる。また，「性について自分が指導できると思うこと」の回答の上位 3 つは「妊娠の仕組み」「避妊の方法」「月経について」であり，これらは学校の性に関する指導で教わったことがあるという項目でも上位であり，学校での性に関する指導を自分の知識として生かすことができると考える大学生も多いと考えられる。性について正しい知識を持つ高校生は性感染症などの課題をより身近なものとして捉え，性に関する学習要求も高いという報告[12]もある。やはり，学校での正しい知識の伝達は必要だということだろう。また，「指導を受けた」という回答が少なかった「恋愛」「性の不安や悩みについての相談窓口」については「指導できる」と答えた学生も少なかった。性は，自分自身の生き方にも通じることである。生殖機能や解剖等の知識は伝達できても難しいと感じているのだろう。

全体的には性に関する正しい知識は十分ではなかったが，「児童生徒に自身で性に関する指導を行いたい」意思の有無と性に関する知識の高低との間では有意な差が見られた。「行いたい」と答えた者の平均点は「行いたくない」「わからない」と答えた者の平均点を上回っていた。これは，「児童生徒に性に関する指導を自身で行いたい」という考えの根底に自身の性に関する知識の高低が関係しており，自分に性に関する指導ができるだけの知識があると判断できている者が多いのではないかと考えられる。

大学生の所属選修･課程と性に関する知識の高低間でも有意な差が見られた。「養護教諭養成課程」所属の学生は，「保健体育選修」の所属学生や他選修･課程の学生よりも得点が高い。「保健体育選修」所属の学生の得点が他選修・課程の学生と有意な差が見られなかったのは，調査対象の半数以上が大学 1･2 年生であり，まだ専門科目の履修が少ないため，他の課程･選修とあまり違いが現れなかったのであろう。しかし，多くの学生が保健体育教員に性に関する指導を実施することを望んでいるため，今後の知識の獲得を期待する。また，「養護教諭養成課程」所属の学生は，専門科目の履修の少ない 1・2 年生から性に関する問題を児童生徒の健康課題として捉え，強い関心を持っているため知識の点数の高さに現れたと思われる。また，本研究では，調査対象の大学生のうち 72.4％（349 人）が性に関する指導は養護教諭が行った方がよいと回答しており，養護教諭は性に関する指導を行うことが期待されていると考えられる。廣原ら[13]の報告によると，保健体育教諭は教科「保健」

において，養護教諭に「思春期と性機能」「性とエイズに関する教育」などの性に関する指導を行うことを期待していた。養護教諭は職務の特質に合わせ，保健体育科教科担任と連携しながら，教科「保健」で性に関する指導を行っていくことが求められていると思われる。また，教科以外の特別活動等の時間に，教職員全員が共通理解を図りながら児童生徒の発達段階に合った性に関する指導を実施するために，養護教諭は専門性を生かし，教職員が性に関する指導方法や指導内容に対して相談しやすい環境づくりや，勉強会の開催，またコーディネーター性を生かして外部の専門家などによる研修会の開催など，学校の実態に沿ったさまざまなサポートをしていくことが望ましいと考えられる。

まとめ

調査対象が一つの大学の学生に限定されているため，教育学部の学生全体の一般知識や考えであるとするには無理があろうが，おおよその大学生の傾向は捉えられたと思われる。

調査対象者の大学生 91.3％が，児童生徒に性に関する指導を行うことは「必要である」とし，多くの大学生は，性に関する指導は「保健・体育の教科担任」「養護教諭」等の専門的知識を持つ者が指導を行った方が望ましいと考えていた。

性に関する指導を自身で児童生徒に「行いたい」とする者の割合は全体の 22.2％と少なく，性に関する指導は児童生徒に「必要である」と考えていても，自身で指導を行うことは望んでいない者が多く見られた。指導する自信のなさや性に関する自分の知識不足への不安が，自身が指導を実施することをためらわせていた。このことから，小学校・中学校・高等学校だけでなく，大学でも性に関する正しい知識を提供する保健の講義を行ったり，教職科目の中で全学生が小・中・高校生を想定した性に関する指導を行う機会を作ったりするなど，教員になることを目指す大学生が「性に関する指導」を身近に感じることができる環境を作ることが必要であることが示唆された。

学校で今までに受けたことのある性に関する指導内容については，約 80％以上が「HIV/エイズ」「性感染症」「妊娠の仕組み」「月経について」「避妊の方法」を「受けたことがある」と答える一方，「性の不安や悩みについての相談窓口」「恋愛」は少なかった。自分が教員になったと仮定し，性について自分が指導できると思う内容は，自分が受けた教育内容とほぼ一致していた。

性に関する知識を問う項目では，正解率が高い内容もあったが，正解率の低いものも見られ，十分に知識は定着していなかった。養護教諭養成課程所属の学生とその他の選修・課程に所属する学生では，養護教諭養成課程所属の学生の方が性に関する知識は有意に高かった。

謝　辞

本研究を行うにあたり，多くの方々にご支援・ご協力をいただきました。この場をお借りして，感謝を申し上げます。

質問紙調査の実施に関しては，貴重な講義のお時間にも関わらず，多くの先生に快くご協力していただき，大変感謝しております。また，学生の皆さまも 1 人 1 人が丁寧に質問を答えて下さり，多くの回答を得ることができました。ありがとうございました。

注

1）片瀬一男.「「リスク」としての性行動・「危険」としての性行動－避妊をめぐる男女の非対称性－」『東北学院大学教養学部論集』174（2016），17 ‐ 42.

2）厚生労働省.「性感染症報告数」(2017 年 11 月 27 日閲覧)
http://www.mhlw.go.jp/topics/2005/04/tp0411-1.html

3）AIDS/STI - related database Japan.「主要先進国におけるHIV流行の現状」(2017 年 11 月 27 日閲覧)
http://www.aidssti.com/m_006_002.html

4）文部科学省.「性同一性障害や性的指向・性自認に係る，児童生徒に対するきめ細かな対応等の実施について（教職員向け)」(2017 年 11 月 27 日閲覧)
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/04/__icsFiles/afieldfile/2016/04/01/1369211_01.pdf#search=%27%EF%BC%AC%EF%BC%A7%EF%BC%A2%EF%BC%B4+%E6%96%87%E9%83%A8%E7%A7%91%E5%AD%A6%E7%9C%81%27

5）坂口早苗，坂口武洋.「セクシュアリティにかかわる教育－性・生命・愛の教育－(2)」『川村学園女子大学研究紀要』17，1（2006），111 ‐ 123.

6）中央教育審議会　初等中等教育分社会　教育課程部会 健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会.「これまでの審議の状況－すべての子どもたちが身に付けているべきミニマムとは？」(2018 年 8 月 28 日閲覧)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/022/siryo/06092114/001/004/003.htm

7）石川裕子・上甲廣文・光宗勝次・篠崎美幸・山上博彦・山本千鶴子・渡部美知子.「学校における性教育の指導に関する調査・研究－現状と課題－」『愛媛県総合教育センター研究紀要』72（2006），89 ‐ 97.

8）広瀬裕子.「学校の性教育に対する近年日本における批判動向－「性教育バッシング」に対する政府対応－」『社会科学年報』48（2014），193 ‐ 211.

9）今井博久.「高校生のクラミジア感染症の蔓延状況と予防対策」『日本化学療法学会雑誌』55（2004），2，135 ‐ 142.

10）中西絵里.「LGBTの現状と課題－性的指向又は性自認に関する差別とその解消への動き－」『立法と調査』394（2017），3 ‐ 17.

11）渡辺真由子.「メディアの性情報と性情報リテラシー－性教育にメディア・リテラシーを－」『現代性教育研究ジャーナル』25（2013），1 ‐ 6.

12）廣原紀恵・服部恒明.「高校生男子のSTD（性感染症）に関する知識と性行動の意識について」『茨城大学教育学部紀要（教育科学)』56（2007），155 ‐ 164.

13）廣原紀恵・服部恒明・植田誠治.「高等学校保健体育教諭を対象とした養護教諭による教科「保健」担当に対する意識調査」『学校保健研究』45（2003），225 ‐ 232.